

文理の垣根を越えた推理小説

理工学部物理情報工学科 教授

田中敏幸たなかとしゆき

推理小説ファンの一人として、最近特に気に入っているものがいくつかあります。東野圭吾氏の「ガリレオシリーズ」がそのひとつです。推理小説では事件が起きたときに残された痕跡を集め、それらをつなぎ合わせることによって事件の本質に近づきます。しかし、このガリレオシリーズでは、残された痕跡だけでは謎を解くことができず、痕跡の工学的理論を理解して初めて事件の本質に迫ることができません。帝都大学理工学部・湯川准教授が事件の痕跡に隠された技術突き止め、そこから犯人を割り出していきます。東野氏自身が工学部の出身ということもあり、極めて工学的センスに優れた推理小説になっています。また、最近出版された『ブラチナデータ』や『パラドックス13』では、扱っている理論の中に工学的話題になっているDNA捜査システム、スーパーコンピュータ、超弦理論などいろいろな話題が含まれ、かつSF的な要素も含まれています。

次に紹介したいのが、三上延氏の『ビブリア古書堂の事件手帖』です。ビブリア古書堂に持ち込まれる日常の問題を若い女主人・篠川栞子が推理で解決していくという内容です。本の収集はその人の人生を表しており、関係者が読んでいる本から出来事の本質を推理していくのですが、これはプロファイリング、ビッグデータ、データマイニングなどの工学的応用に通じるところがあります。物語としては、栞子が行方不明の母親を探すという大きな問題の解決が全体のテーマとなっており、その大きな物語の合間を縫うように日常の小さな物語があるという設定になっています。私が子供のころに見た「昆虫物語 みなしごハッチ」というアニメの設定に似ていることもこの推理小説を気に入っている要因です。

どのような仕事でも、大成しようと思うと最終的には文系理系両方のセンスが必要になってくると思います。最も文系的な仕事であると思われる小説の執筆活動においても、文理両方のセンスが必要になってきたようです。



東野圭吾著『探偵ガリレオ』
文春文庫



三上延著『ビブリア古書堂の事件手帖』
メディアワークス文庫

株式会社 KADOKAWA アスキー・メディアワークス

教員によるセミナー
談話室